No. 1374

防災計画に消える町

―東　京・江戸川―

尊い人命や貴重な財産をおびやかす恐しい大地震。東京のゼロメートル地帯と呼ばれる江東区小松川。この地区に防災拠点が計画されたのは今から11年前。この計画は東京都が江東再開発基本構想のもとに大地震に備えて20万人が避難できるよう考えたもので、54年の完成を目ざして50年８月に都市計画事業としてスタートした。しかし、その年、住民からの告発で問題になったのが六価クロム汚染。日本化工の工場跡が防災敷地で大きな割合をしめるため計画はストップ。なかなか計画が進まないためごうを煮やしてこの地を去る人も出てきた。この10年間にこの地を去った人は2.000人を超えた。昼でもあまり人通りがなく、これが都心かと思わず疑ってしまうほど。この人口の減少でもろに打撃を受けたのが商店街。町が急激にさびれ出した4.5年前から売上げはガタ落ち経営が成り立たなくなり、約20軒が店を閉めた。通学区域の小松川第２小学校の児童数も半分に減った。商店の経営者は「困っています。計画を進めるなら早くしてほしい」現状を切実に訴える。住民を収容する高層住宅の建設は具体化したものの、まだ完成のはっきりした目どは立っていない。防災か、生活か、銀座から20分というこの都心のひとつの町が消えようとしている。

大平首相、首脳外交へ

―アメリカ・メキシコ・カナダ―

４月30日、首脳外交へ発った大平首相は５月１日、ホワイトハウスでカーター米大統領と首脳会談をもった。
会談に先立ち、アメリカはファンファーレで歓迎。カーター大統領がしきりに英語で話しかけると大平首相も笑顔でしきりにうなずく。首脳会談では、日本の防衛力強化をはじめ、対米協調の姿勢が打ち出され、「全方位外交」から「日米基軸」路線へと移った。翌２日、次の訪問国メキシコへ。一行はキャペル・テペック公園内の「祖国への祭壇」へ献花。その後ロペス大統頃との首脳会談。会談で大平首相は原油供給を増量してほしいと要請したが、これに対し、メキシコ側は具体的な約束を避けた。「メヒコ、ハポン」と大合唱で出迎える日墨学院の子供たち。首相も精一杯、大平スマイルでこたえた。一行は５日、カナダの歓迎式典に臨んだ。引き続き行なわれたトルドー首相との首脳会談では、世界の平和のため、自由主義諸国が連帯するとともに、日本とカナダは「太平洋をはさむ隣人」として友好関係をさらに深めることを誓った。